

朝、川を渡る

人言を 繁み言痛み 己が世に
いまだ渡らぬ 朝川渡る
(巻二——一六)

これは但馬皇女が穂積皇子のもとに赴くときに詠んだ歌で、「人の噂が多くなるさいので、生まれて初めて夜明けの川を渡ることよ」という意味です。題詞によると、但馬皇女は高市皇子の宮にいたとありますから、高市皇子の正妻だったのでしょうか。そうなる、これは不倫ということになります。

妻問婚の時代ですから、複数の男が女性のもとに通ってきてても、男性が複数の女性に通っても、許されます。ただそれは親元で育てられている女性が恋愛するときのことで、同居している夫婦のうちの正妻となれば、話は別です。さらに女性のもとに男性が通って



明日香を流れる川。歌の中の川は、実景ではなく、心象風景であろう。

きたのではなく、女性が男性のもとに（しかも白昼）奔るのは、かなり不謹慎な行為です。スキャンダラスな関係と騒がれ、世間の指弾をうけています。しかしそやむをえないでしょう。しかしそう簡単に言い捨ててしまつては、かわいそうな所もあります。但馬皇女・穂積皇子・高市皇子は、たがいに異母兄妹の關係にありました。いまだでは変ですが、同母でないので恋愛・結婚に支障はありません。当時の皇子女たちは、おなじ皇族と結婚するケースが多々みられます。身

分・家柄が釣り合うからです。氏族ならば同格の氏族員まで広げれば選択肢も豊かですが、皇族は数が知れていませ。しかもこまかくいえば天皇に近いほど高貴と見なされており、高貴な皇子と釣り合うのは高貴な皇女となりませ。少数の血縁者の中で、年のあう皇族同士が結婚するわけです。そのとき自由意思がきくならまだよいですが、ほとんどは親同士で決めたか政略結婚です。そうして結婚したあとで、魂が求める愛に目覚めた時、心の葛藤は計り知れないものがあつたと思います。現代は恋愛の進行を阻む障害が少なくなっています。しかし身分や家柄こそ問われませんが、資産・年齢などの大きな差はなお障害の一つとなりえます。そして反対が強く厳しいほど、激しく燃えさかるものです。この歌に嫌悪感を懐く方がいるのは当然としても、共感を覚える方もいるのではないでしょう。